

## 喜志南遺跡で見つかった「(仮称) 喜志南カイト古墳」について

2024(令和6)年6月15日(土)  
富田林市教育委員会生涯学習部文化財課  
調査担当：角南 辰馬

### 今回の調査成果のポイント

- ・喜志南遺跡内で、新たな古墳を発見しました（仮称・喜志南カイト古墳）。  
中世に削られ、地表には残っていませんでしたが、埋もれていた墳丘、周濠（しゅうごう）、さらにその外側の外堤（がいてい）が見つかりました。
- ・墳丘の形は方墳で、大きさは一辺 30m 程度（推定）です。この時期の方墳としては、大きい部類に入ります。周濠の幅は約 6m と大変広く、外堤の内側斜面にも葺石（ふきいし）を施すなど、充実した外部施設をもっています。
- ・外堤上には、大王墓のものと遜色のない大型の円筒（えんとう）埴輪と、初期の馬形埴輪が、墳丘上にはやや小型の円筒埴輪と、蓋形（きぬがさがた）埴輪が並べられていたようです。埴輪の特徴から、5世紀前半の古墳と考えられます。  
※喜志南遺跡の別地点では、2021年度に浮ヶ澤（うきがさわ）古墳が見つっていますが、今回はそれより半世紀以上も古い時期になります。
- ・北へ約4kmには古市古墳群の中心部があり、そこでは同じような埴輪、外部施設をもつ方墳が複数みられますが、それらは大王墓の周りに配置された「陪塚（ばいちょう・ばいづか）」と呼ばれる従属墓です。こうした方墳が単独で見つかるのは異例であり、方墳という形を採用していることを重視すれば、古市古墳群での古墳・埴輪づくりに大きく貢献した人物が埋葬されていたのではないかと考えられます。

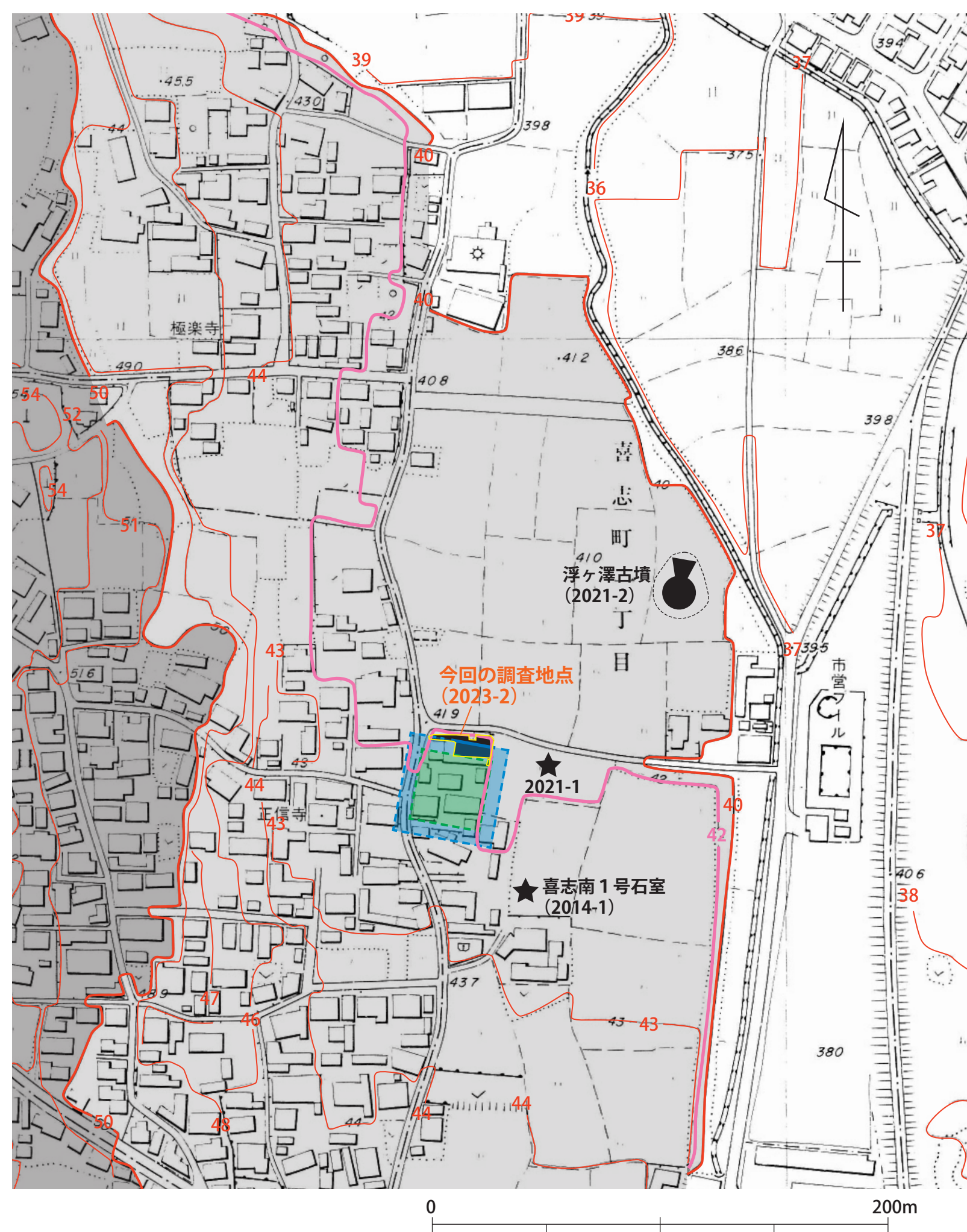


図1 調査地の位置および古墳復元案 (S=1/2,000)

※1972（昭和47）年作製の都市計画図（原図：S=1/2,500）を使用し、判別できた等高線をトレースした。



## 成果等の詳細

### 1. 発掘調査の経緯と経過

#### (1) 調査の経緯

富田林市喜志町一丁目（2023-2 地点）において、宅地造成が計画されました。試掘調査で遺跡があることを確認し、2023（令和5）年11月から12月にかけて発掘調査（本調査）を行いました。

調査対象範囲は、北側に隣接する道路の拡幅部分と、駐車場設置のために切土される部分です（本調査区1）。本調査区1の調査結果を受けて、追加で調査区を設定し（本調査区2）、本調査終了後の擁壁工事の際は、立会調査を行いました（立会調査区）。

なお、調査地はすでに宅地となっており、見学することはできません。

#### (2) 見つかった遺構と遺物

地表面から深さ1～1.5mで、これまで全く知られていなかった古墳の跡が現れました。周濠や葺石を施した外堤のほか、墳丘もごく一部を確認しました。見つかった遺物の量は、周濠内を中心に整理コンテナ約35箱分に及びます。そのほとんどは円筒埴輪で、馬形や蓋形といった形象埴輪も含まれています。

### 2. 確認した古墳について

古墳は中世に削平され、調査前の地表面には痕跡が残っていませんでしたが、本調査区1で周濠と外堤の一部を確認しました。古墳が造られる前の西側は、湿地（もしくは旧河道）だったようで、それを埋めたうえで造られています。

#### (1) 外堤

周濠に面する外堤の内側斜面には、葺石が施されていました。外堤は東西方向にまっすぐのびており、葺石は長さ約17mにわたって残っていました。西側は地盤の不安定さや、後世の改変などで残りが良くありませんでしたが、土層の堆積状況から、調査区外へのびていくと判断しました。

外堤の葺石には、最も下の段に大きめ（20cm前後）の石材が使われていますが、それ以外は拳大程度の小さなものです。ごく一部には安山岩がみられますが、ほとんどは地山に含まれる礫を利用したものと考えられます。

#### (2) 墳丘

外堤の葺石と対面する側、すなわち墳丘の斜面は、本調査区1の中では確認できませんで

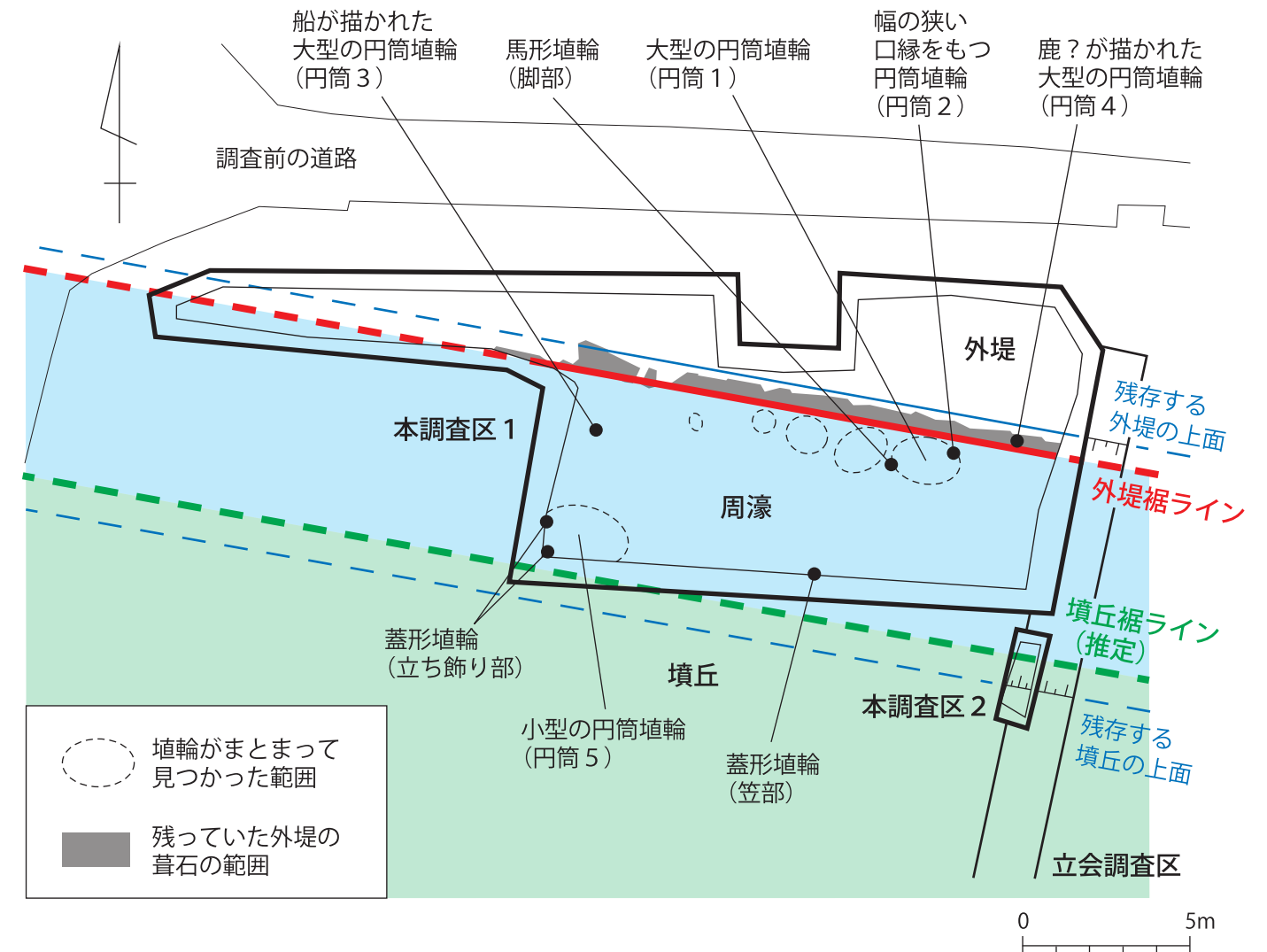


図2 今回の調査区の平面略図 (S=1/200)

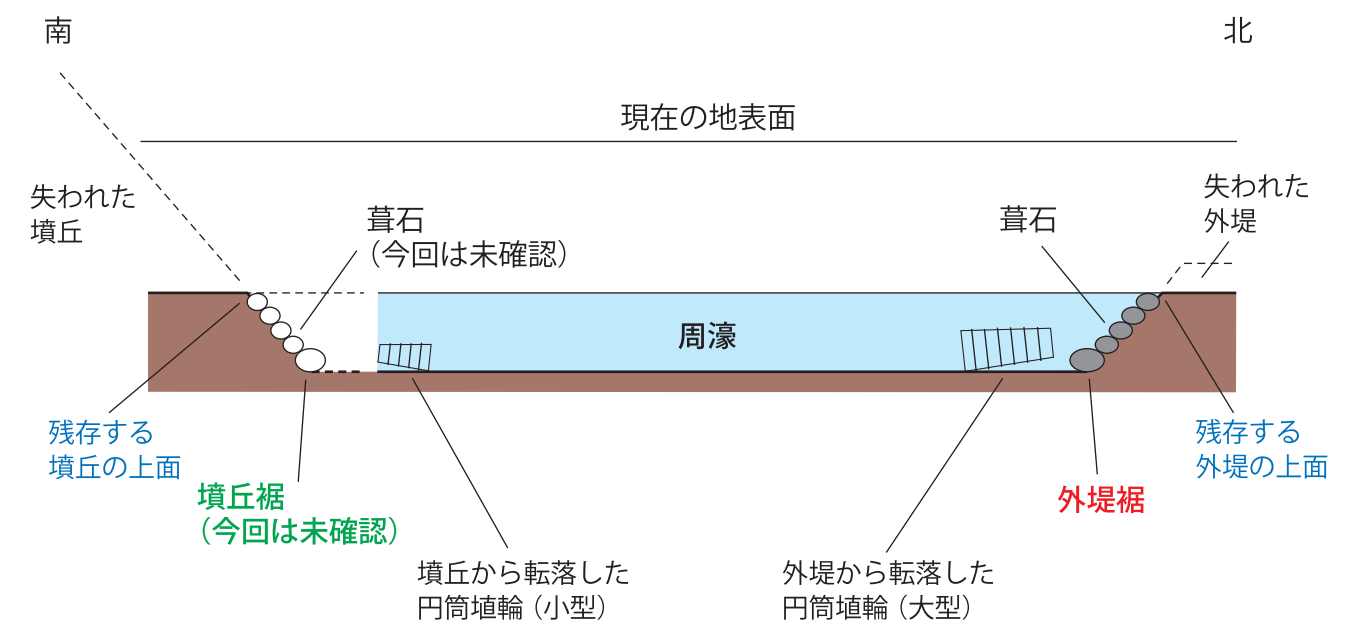


図3 古墳の断面模式図

した。しかし、本調査区2と立会調査区では、墳丘の一部を確認できました。残っていた墳丘上面の標高は、対面する外堤上面の標高と一致しています。調査上の制約から、墳丘斜面を調べることはできませんでしたが、転落した石が多く詰まった層があることを確認できました。また、本調査区1の墳丘に最も近い部分でも、石がまとまって見つかりました。よって、墳丘斜面にも葺石が施されていたのは確実です。

### (3) 周濠

本調査区1で確認できた最大幅は、周濠底で約5.5mでしたが、前述した墳丘の状況から、幅は周濠底で約6mと復元できます。深さは、残っていた外堤の上面から計測して約35cmで、底は綺麗に水平に掘削されています。周濠内には粘性の強い粘質土が堆積しており、現在も水が湧くような状態であることから、水が一定量は溜まっていたと考えられます。

## 3. 円筒埴輪について

円筒埴輪は、墳丘や外堤上に垣根のように並べられました。底部（地面に接する底の部分）の直径が30cm前半の大型品（円筒1～4）と、約20cmの小型品（円筒5）が出土しています。出土状況から、外堤には大型品、墳丘には小型品が置かれていたと考えられます。

埴輪の表面には黒斑（こくはん：野焼きで焼かれた際に、表面みられる黒い焼きムラ）が見られないことから、すべて窖窯（あながま：斜面にトンネル状の穴を掘って造った窯）で焼かれたものと考えられます。最も残存状態の良い個体は、ほぼ完全な須恵質になっています（円筒1）。

大型品の中には、古市古墳群と同じ特徴をもつ、口縁部（こうえんぶ：最も上端の部分から、突帯と呼ばれる帯状の部分まで）の幅が非常に狭いものが、1個体含まれています（円筒2）。また、船と菱形や、鹿（？）が線刻されているものもあります（円筒3・4）。船については、両先端が二股に分かれる「二股式の準構造船」の特徴をよく捉えています。

埴輪が作られた時期は、5世紀前半と考えられます。窖窯が本格的に導入されたころにあたり、古市古墳群では誉田御廟山古墳（羽曳野市）が造られた時期です。

## 4. 形象埴輪について

### (1) 馬形埴輪

外堤に近い側の周濠底から、脚部が1本見つかりました。下端は段差をもって外側に開き、一箇所にはくり込みがみられ、蹄（ひづめ）を写實的に表現しています。

馬形埴輪は、5世紀初めの野中宮山古墳（藤井寺市）で出土したものが最古で、今回のものはそれに続く初期の資料となります。また、出土状況から外堤に置かれていたのは確実で、配置場所の分かる資料という点でも、重要なものといえます。

### (2) 蓋形埴輪

蓋（きぬがさ）とは、貴人にさしかける傘のことです。調査区南辺に沿うように、東西に5～6m間隔で大きい破片が見つかり、墳丘上に一定の間隔で配置されていた可能性があります。本調査区1の南西隅付近で見つかった立ち飾り部には、3本線による弧線文が描かれ、4枚の飾り板を受ける皿状の部分からのびた軸部（笠部の頂部に挿し込む筒状の部分）は太くて長く、重厚感があります。

## 5. 古墳の復元と名称

今回は古墳の一部を調査したにすぎないため、古墳の正確な規模や形状は分かりません。しかし、旧地形の状況や、周辺の過去の調査成果を援用することで、復元は十分に可能と考えています。

まず、旧地形に注目すると、今回の調査地から北東方向にかけては、低位段丘内の平坦地（標高41m前後）が広がっており、東側の段丘崖の付近には、5世紀末の埋没古墳である浮ヶ澤（うきがさわ）古墳を確認した2021-2地点があります。

今回の調査地は、この平坦地の南西隅に位置しており、西側へ進むと中位段丘に向かって標高が急激に上がるため、古墳が西側に大きくのびることは考えにくい状況です。また、東側の2021-1地点の調査では、円筒・形象埴輪や埴製不明品が出土しているものの、古墳に直接関わる遺構は見つかりません。今回の調査地との間で、周濠・外堤が南へ屈曲していると考えられます。

次に、調査地と重なる標高42mの等高線をみると、2021-1地点との間で一度南へ屈曲した後、調査地に向かって北へ再び屈曲します。調査地北端に沿って西へ進んだ後、西側の道路で再び同様の屈曲を繰り返し、中位段丘崖に沿って北へとのびていきます。

また、調査地北西で接続する2本の道路についても、北側の道路は調査地付近で北へ膨らんでから接続し、西側の道路は接続前に西へ蛇行しています。この道路形態は、今も現地に残っています。

こうした旧地形や道路の状況は、中世まで残存していた墳丘や周濠・外堤の影響を受けたものである可能性が考えられます。以上の状況から、今回見つかった古墳については、一辺約30mの方墳という復元案を提示したいと思います。

今後の研究や活用のために、古墳に名称を付けるのが望ましいことから、今回の調査地の小字名である「カイト」を採って、「喜志南カイト古墳」と仮称することにします。



## 6. 学識者のコメント

調査成果の公表にあたって、発掘調査現場を視察いただいた古墳時代の研究者から、以下のとおりコメントをいただいています。

岸本 直文 氏（大阪公立大学大学院文学研究科教授）

古市・百舌鳥古墳群が造営され、王墓がもっとも巨大化する5世紀前半は、古市古墳群より南の石川流域では、これまで寛弘寺古墳群（河南町）が知られる程度であった。今回、古市古墳群により近い富田林で「喜志南カイト古墳」が発見され、古墳空白地でなく、この地域を任された有力者がいたことが判明した。石川に程近い段丘に築造され、河川交通の管理も担っていたように思われる。一辺30mと推定される規模をもち、埴輪を樹立した整った周堤を完備し、出土した埴輪も古市古墳群のものに類似する。墳丘が前方後円墳や円墳でなく、方墳であることの評価は難しいが、陪塚に多いこと、墳丘や埴輪の様相からすると、王権直属的な地位にあったとみることもできるだろう。

犬木 努 氏（大阪大谷大学文学部教授）

喜志南カイト古墳から出土した円筒埴輪は、古市古墳群に供給・樹立されている大型円筒埴輪と比較して、形態的・法量的・技術的にも全く遜色のないものである。そのような埴輪が、喜志南カイト古墳に供給・樹立されている点は、5世紀前半（古墳時代中期）における古市古墳群と当地域（石川中流域）の政治的関係を考える上で、非常に重要である。

市内でこれまでに確認されている方墳は、いずれも4世紀（古墳時代前期）のものであり、中期の方墳としては市内初の確認事例である。前者は、弥生時代の方形低墳丘墓の流れを汲む《共同体的秩序を表象する墓制》としての「方墳」であるのに対して、後者はあくまでも《前方後円墳—帆立貝形古墳—円墳—方墳》という《政治的な階層秩序を表象する墓制》の一端（末端）を担う存在としての「方墳」である、という大きな相違がある。喜志南カイト古墳は、上記のような古市古墳群を頂点とする政治的な階層秩序（の末端）に組み込まれていたからこそ、「方墳」という墳形の採用を容認され、古市古墳群の造営勢力から、葺石や埴輪など様々な最先端の技術供与を受けたものと推測される。

今後、墳形や墳丘規模をより正確に確定するための追加調査や、地中レーダー探査などの実施が望まれる。また、本古墳出土埴輪の生産地については、埴輪の細部の特徴から古市古墳群内の可能性が高いと考えられるが、当地域で生産された可能性もある。出土埴輪の科学分析（蛍光X線分析）を実施し、より精度の高い産地推定を行う必要がある。



写真1 喜志南カイト古墳近景（西から）  
左が外堤、葺石より右が周濠



写真2 喜志南カイト古墳近景（南西から）  
左上が外堤、右下が周濠



写真3 出土直後の円筒埴輪（北西から）  
灰色の埴輪が円筒1